

日本旧石器学会
ニュースレター 第8号
NEWS LETTER No.8
JAPANESE PALAEOLOGICAL RESEARCH ASSOCIATION

第5回日本旧石器学会の開催

2007年6月23日・24日に東京都東京大学本郷キャンパス法文2号館において、第5回日本旧石器学会が開催され、総会、記念講演、一般研究発表、ならびにシンポジウム「旧石器時代の生活を考える」が行われた。

1日目は総会の後、午後から記念講演が行われた。演者は中国・吉林大学陳全家氏で、演題は「中国東北地区における近年の旧石器考古の発見と研究」である。講演では、2000～2006年に中国東北地区（黒竜江省、吉林省、遼寧省、内蒙古自治区東部）で発見された14遺跡の概要とこれらの遺跡の調査から得られた成果について紹介された。引き続いて一般研究発表が行われ、6本の発表があった。発掘調査関連1本、国内研究4本、国外研究1本（西アジア）である。研究対象は多岐であるが、対象テーマでは石材に関連するもの、対象時期では旧石器時代末～縄文時代初頭がやや多かった。

2日目はシンポジウムで、午前中に基調報告、午後からパネルディスカッションが行われた。基調報告では、人骨抽出たんぱく質起源の同位体によるヨーロッパ中期・後期旧石器時代人の食性の推定（米田穰）、シベリアの遺跡出土動物遺体を中心とした分析に基づく日本列島の旧石器時代における動物質食料の検討（木村英明）、植生、アク抜き技術、調理加工・調理具、居住様式などの分析に基づく岩宿時代（旧石器時代）の植物質食料の検討（鈴木忠司）、石器の使用痕分析から見た旧石器時代の石器の対象物、生業の推定（山田しょう）、神奈川県田名向原遺跡No.4地点の分析を中心とする旧石器時代の住居と機能の検討（島田和高）、東関東を主たる分析対象とした後期旧石器時代集団の移動と領域の復元（国武貞克）が行われた。基調報告の後、パネルディスカッションが行われ、旧石器時代の資源利用、旧石器時代の居住の2つのテーマについて討論が行われた。前者では、食資源を動物質と植物質の大きく2つに分け、大型動物の捕獲、水産資源の利用、長距離移動性動物の捕獲法、潜在的食料資源と石器から見た利用可能植物などが検討された。後者では、「家」の定義と石器ブロックの関係、田名向原遺跡の住居跡の機能などが検討された。

2日間を通じてポスターセッションが行われ、6本の発表があった。多くの参加者があり、熱心な議論が行われた。



シンポジウム・パネルディスカッションの様相

2006 年度委員会活動報告

総務委員会 第4回役員会（2006年5月）、総務委員会・会計委員会合同会議（2006年6月）、第4回総会（2006年6月）、総務委員会・会計委員会合同会議（2007年3月）の各会議に際して、資料作成ならびに会場・連絡調整を行った。このほか、各委員会間の調整、会誌（『旧石器研究』2号）・ニュースレター（6号）会員への発送、シンポジウム予稿集の会員への配布、新入会員の入会・会員の住所変更等に関する諸事務、地域研究会との共同開催等に関するアンケートの実施を行った。なお、昨年度の新入会員は21名、昨年度末の会員は218名である。

会誌委員会 会誌第3号の編集、刊行を行った。編集は委員が分担して行い、最終的な原稿の取りまとめ、編集、印刷所との交渉などを諏訪間が行った。本号は第4回シンポジウム「旧石器時代の狩猟を考える」の成果を反映させるためシンポジウム小特集を企画したが、発表内容が既発表のものと同重複することから執筆辞退者も多く、発表者2名、シンポジウム報告者1名の原稿を掲載するに留まった。一般原稿は11本投稿されたが、最終的に8本を受付した。論文、研究ノートについては、匿名で査読をお願いし、査読結果を受けて修正を求め、適切に修正が行われた7本について受理した。最終的に、巻頭言1、シンポジウム関係で、総説1、論文1、シンポジウム報告1、一般原稿では、論文3、研究ノート2、書評1、データベース委員会中間報告1などで構成し、表紙、目次などを加えて合計178頁となった。査読制度が定着し、編集作業はおおむね予定通り進行したが、投稿が予定よりも大幅に遅れる原稿も多く、編集・査読期間が十分に確保できない状況であったことから、次号以降改善策を検討したい。

渉外委員会 国際学会の設立準備と韓国、中国、ロシアとの情報交換が主な活動である。国際学会の立ち上げのため2006年4月に第1回設立準備委員会を北京で開催する予定であったが、直前になってロシアの不参加が判明した。4ヶ国の代表が揃うことが前提であるので、急遽日本側から準備委員会開催延期の申し入れを行い、第1回設立準備委員会の受け入れ責任者である高星氏が公式に各国代表へ延期の連絡が行った。その後、韓国、中国とは個別に事態の打開に向けて連絡しているが、準備委員会の再開の目途は立っていない。情報交換の一環として各国組織間でそれぞれの機関誌に各国の組織を紹介する記事を掲載することにしており、韓国の組織紹介に続いて中国の学会（古人類・旧石器専門委員会）の設立についてニュースレター第7号に掲載した。中国側に執筆を依頼していたが、都合により佐川正敏会員に参加記を執筆していただき、その代替とした。本会からの情報発信としては、旧石器研究第2号、ニュースレター第5号・第6号および第5回大会プログラム（英語版）を韓国、中国、ロシアの学会事務局宛に送付した。

ニュースレター委員会 2006年度は2006年10月に第6号、2007年4月に第7号を発行した。第6号は特別寄稿「白滝遺跡群の旧石器時代遺跡の調査成果と最近の状況について」、第4回総会・シンポジウム報告、2004－2005年度各委員会活動報告、2006年度の各委員会活動計画報告などを掲載した。特別寄稿は北海道教育委員会長沼孝氏の執筆によるもので、白滝遺跡群は10年以上の継続的な発掘調査により膨大な成果が蓄積され、その全貌を把握するのが困難な状態であったが、長年調査に携わった長沼氏によりその成果が適切にまとめられている。第7号は、特別寄稿「山陰・中国山地の最近の旧石器時代研究」、「中国古人類旧石器専門委員会第1回大会の開催につい

て」などを掲載した。特別寄稿は島根県埋蔵文化財センター伊藤徳広氏によるもので、島根県原田遺跡調査成果を中心に山陰および中国山地における近年の旧石器時代遺跡の調査成果についてまとめていただいた。中国古人類旧石器専門委員会第1回大会の報告は宮城県佐川正敏会員によるもので、参加記の形でご報告をお願いした。

研究企画委員会 2006年6月17・18日開催のシンポジウム「旧石器時代の狩猟を考える」の企画を立案し、一般研究発表、ポスターセッションを含めた開催準備（発表依頼、シンポジウム予稿集の編集・刊行）ならびに当日の運営を行った。

データベース委員会 日本旧石器時代（先土器・岩宿）遺跡データベース作成作業を継続している。2007年3月現在で、47都道府県中30都道府県からデータの提出があり、遺跡総数は6024ヶ所である。複数文化層が多数存在する関東地方などでは集成作業に時間がかかり、提出が遅れているが、全国の遺跡総数は10000ヶ所を超えると予想される。

2007年度委員会活動計画

総務委員会 昨年度とほぼ同様の活動計画であり、総会・役員会開催にあたっての会場・連絡調整、各委員会間の調整、会誌（3号）、ニュースレター（7・8・9号）の会員への発送、入会・会員住所変更等に関する諸事務などである。新入会員の拡大や国際学会設立時の事務局体制や昨年度実施したアンケートに関連して地域開催の検討など今後の課題解決を視野に入れた活動も予定している。

会誌委員会 会誌第4号の編集を行い、2008年5月に刊行の予定である。第4号の原稿締め切りは2007年10月30日で、巻頭言1、総説1、原著論文8以内、研究ノート1、資料

報告1、書評1、2006年度活動報告などで構成する予定である。原稿の締め切りと執筆区分によるページ数の厳守をお願いしたい。

渉外委員会 まず、国際学会組織立ち上げの膠着状態の原因についてできる限り説明できるようにするとともに、事態が好転するように働きかけを行いたい。ロシアの全国組織の紹介をニュースレターに掲載できるように努めるとともに、中国側からの紹介記事を掲載できるように再度打診する。機関誌、ニュースレター、大会プログラムの送付、日本旧石器学会の英文紹介記事の発信を、韓国、中国、ロシアの学会に向けて継続する。また、これら3ヶ国の学会の関連資料、案内などを日本旧石器学会へ送付するように要請する。

ニュースレター委員会 第8号を2007年10月初旬、第9号を2008年3月末に発行の予定である。第8号は2007年6月に開催した第5回総会、一般研究発表、シンポジウムなどの報告、各委員会の2006年度活動報告、2007年度の活動計画、海外調査研究動向などを掲載予定である。第9号の内容は未定であるが、旧石器時代研究に関する関連学会の研究動向などを計画している。

研究企画委員会 第6回シンポジウム、記念講演、一般研究発表、ポスターセッションの準備および当日の運営を行う予定である。また、引き続いて、2008年度に実施する予定の第7回シンポジウム、記念講演の企画を検討する。

データベース委員会 データベース原稿の締め切りは、当初、2005年9月に設定したが、それから約2年過ぎた現在もデータ収集が完了していない。原稿未提出の都道府県には、原稿作成状況の確認と協力体制強化などの措置をとり、今年度中の完成を目指したい。また、すでに提出済みのデータについては編集作業に入る予定である。原稿の締め切りか

らかなりの期間が経過しているため、既提出のデータについても更新が必要なものがあり、今後更新の方法について検討する。また、公開の方法についても今年度検討する予定である。

日本旧石器学会 2006 年度決算内訳

通常会計

単位：円

収 入				
費 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
1 会費収入				
会費収入	1,050,000	990,000	- 60,000	(2006 年度 161 名)、(前年度分 5 名)、(2007 ~ 2008 年度 31 名)
2 雑収入				
会誌頒布代金	540,000	467,000	- 73,000	旧石器研究 1 号、2 号
シンポジウム予稿集頒布代金	312,000	271,600	- 40,400	第 1 回 ~ 第 4 回予稿集売上
雑収入		7,750	7,750	
前期繰越収支差額	706,565	706,565	0	
小計①	2,608,565	2,442,915	- 165,650	
支 出				
費 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
会議費・会場設営費	25,000	26,680	1,680	役員会会議費
旅費交通費	80,000	0	- 80,000	役員会交通費、国際会議折衝渡航費の補填、他
通信運搬費	182,500	89,200	- 93,300	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、校正連絡、他
消耗品費	47,000	5,964	- 41,036	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,249,500	1,217,390	- 32,110	会誌、ニュースレター、他
諸謝金	228,000	127,000	- 101,000	講演・シンポジウム発表謝金、旅費補助
雑費	10,000	13,710	3,710	図書交換卓料
予備費	786,565	0	- 786,565	予備費、他
小計②	2,608,565	1,479,944	- 1,128,621	
次期繰越金①-②	0	962,971	962,971	

日本旧石器学会 2007 年度予算内訳

通常会計

単位：円

収 入				
費 目	予算額	前年度予算額	増 減	摘 要
1 会費収入				
会費収入	1,360,000	1,050,000	310,000	(会員 218 名) × 5,000 円、(前年度分 54 名) × 5,000 円
2 雑収入				
会誌頒布代金	460,000	540,000	- 80,000	80 部 * 4000 円 = 320,000 円、バックナンバー 140,000 円
シンポジウム予稿集頒布代金	331,500	312,000	19,500	会員頒布 85 部 * 1,200 円 = 102,000 円、一般頒布 100 部 × 1,500 円 = 150,000 円、バックナンバー 79,500 円
前期繰越収支差額	962,971	706,565	256,406	
小計①	3,114,471	2,608,565	505,906	
支 出				
費 目	予算総額	予算額	増 減	摘 要
会議費・会場設営費	55,000	25,000	30,000	役員会会議費、総会会場器材使用料、他
旅費交通費	80,000	80,000	0	役員会交通費、国際会議折衝渡航費の補填、他
通信運搬費	229,500	182,500	47,000	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、校正連絡、他
消耗品費	49,500	47,000	2,500	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,388,500	1,249,500	139,000	会誌、ニュースレター、他
諸謝金	125,000	228,000	- 103,000	臨時事務補助謝金、講演・シンポジウム発表謝金、他
雑費	14,000	10,000	4,000	雑費
予備費	1,172,971	786,565	386,406	予備費、他
小計②	3,114,471	2,608,565	505,906	
小計①-小計②	0	0	0	

役員選挙のお知らせ

日本旧石器学会の役員選挙告示

2007年10月28日

会員各位

日本旧石器学会選挙管理委員会

委員長 加藤秀之

日本旧石器学会会則6・7条および役員・会計監査委員・顧問選出規定により、下記のとおり、役員選挙を実施いたします。

記

1. 立候補者・候補者推薦の受付

立候補者および候補者推薦は、別記作成方法により、2007年12月30日（日）まで日本旧石器学会選挙管理委員会（〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 愛知学院大学文学部歴史学科白石研究室内 日本旧石器学会事務局）に届け出てください。その折に公報に掲載する原稿は100字以内です。

2. 選挙公報・投票用紙

2008年1月下旬に発送します。

3. 投票期間

2008年2月1日（金）～2月20日（水）

4. 役員の決定

投票の結果、得票数の上位22位までを役員とします。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、九州7地区の上位得票者から役員1名を選出し、他15名を上位得票者数によって役員とします。辞退者がいる場合は順次繰り上げとなります。

5. 被選挙権のない会員

現役員22名は全員改選の対象になりますが、現役員を含めた会員全員に被選挙権があります。

日本旧石器学会の役員選挙にかかわる公報の 原稿作成について（依頼）

2007年10月28日

立候補者・推薦者各位

日本旧石器学会選挙管理委員会

委員長 加藤秀之

役員選挙立候補・推薦にかかわる公報の原稿については、下記により作成方お願い致します。

記

1. 原稿作成方法

A4版横書きのペン書き、またはワープロ原稿（A4、10.5ポ、横書き、ワード他）。なお、ペン書きの原稿はワープロ原稿に直して掲載します。

1. 推薦候補 ①候補者名、②推薦内容、③推薦者氏名
2. 立候補 ①立候補者名、②自薦内容
②内容は100字以内でお願いします。

2. 送付方法

下記に郵送してください。推薦候補の場合は、本人の承諾を示すサインまたは押印、推薦者のサインまたは押印が必要です。また、立候補の場合は電子メールに添付して送付しても構いません。

3. 原稿締切 2007年12月30日（日）

送付先

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

愛知学院大学文学部 白石浩之

電子メールアドレス hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp

日本旧石器学会役員選挙日程（案）

2007年

10月 本号刊行による告示

12月30日（金）立候補・候補者推薦の締め切り

2008年

1月下旬 選挙公報及び投票用紙送付

2月1日（金）～2月20日（水）選挙期間

2月20日消印まで有効。

2月 選挙管理委員会による開票

3月 ニュースレターにて選挙結果報告

6月 総会にて選挙管理委員長報告

最近のシベリア旧石器研究の動向⁽¹⁾

李憲宗（木浦大学校）

訳 金正培（忠北大学校）

シベリアの旧石器時代研究はロシアを代表する3つの研究機関で集中的に行われている。もっとも多くの研究を遂行している機関はノヴォシビルスクに位置する Institute of Archaeology & Ethnography, SBRAS である。特に、この研究所ではデレヴァンコ A.P.Derevianko 所長を中心にして西部と南部シベリアを含む極東地域全域に対する研究だけではなく中央アジア、西部モンゴルの研究を継続的に行っている。最近、ゴルノアルタイのカラマ Karama 遺跡の発掘により前期旧石器時代の人類の移動に関する関心が高くなり、近東地域でのホモエレクトスの重要移動経路の一つとしてイランに注目して研究を試みている。

特に、この遺跡は北アジアでもっとも古い礫器伝統の遺跡で、60-80 万年を超える遺跡として評価している。また、デニソワ洞窟遺跡最下層の石器文化が洞窟遺跡のなかで最も古い近東の文化と関連づけられる、アシュール・ムステリアン伝統の特徴を持っているという研究結果を発表したことがある。最近までゴルノアルタイ地域の研究は持続されているし、中期旧石器時代及び、中期-後期旧石器時代過渡期研究、細石刃文化の起源問題など、地球規模に及ぶ旧石器研究において主要かつ多様な議題を扱ってきている。このような研究は、多地域起源論に関する理論を体系化する上で大きな役割を果たしており、考古学資料を歴史文化的観点から解釈する土台になっている。

特に、ノヴォシビルスクではこれまでの20年あまり継続してきたモンゴル地域に関する研究を通して、ツァガンアグイ (Tsagan

Agui : 50-30 万年前) 遺跡と後期旧石器時代のチヘン Chikhen、チヘン II、オルオン 1 Orkhon、オルオン 7 遺跡などの研究を行い人類の移動とその範囲を研究して継続的な成果をあげてきた。過去 20 年のあいだ 1000 あまりの地点の旧石器時代の遺跡を確認しているし、それらの地点の表面採集石器の磨耗度を利用して編年を行う体系を確立した。

中央アジアでも豊富な研究成果が得られた。特に、カザフスタン南部コシクルカン I Koshkurgan、コシクルカン II、ショクタク I Shoktak などの重層遺跡からユーラシアで最古の 50 万年前のアシュールアン小形石器群を確認した。

ウズベキスタンではオビラフマート Obi-Rakhmat 洞窟遺跡を対象として、5 万年前の後期旧石器時代遺物と現生人類の骨の化石を研究しているし、キルギズスタン Kyrgyzstan ではトソル Tosop とシュタシーサイ Utash-Sai 遺跡を通して、中期-後期旧石器時代の過渡期及び後期旧石器時代研究を試みた。

最近、この研究所 Institute of Archaeology & Ethnography, SBRAS が行ったもっとも注目される活動は、シベリアやモンゴル及び中央アジアのいろいろな地域に関する今日までの研究を網羅したことである。その一環として、バー・ヨセフ (Bar-Yosef) をはじめとする世界的な碩学を招待して、2005 年 8 月 “Early Human Habitation of Central, North and East Asia: Archaeological and Paleocological Aspects” という主題で、この地域の主要な争点に関する深みのある論議が行われた。特に、多地域起源論の立場からの中期-後期旧石器時代過渡期論争と後期旧石器時代の始まりに関するアジアからみた多様な視点を世界の学会に提示する主要な論議が試みられた。

上記の研究所の主要な役割を果たしている支所がクラスノヤルスク師範代学校とイ

ルクーツク大学校にある。クラスノヤルスク師範大学にはドロズドフ N.I.Drozdov を中心とするアルテメフ、地質学者チェハ教授を中心に、エニセイ河一帯と、特にドロズドフが率いる旧石器研究チームはクルタク地域で多くの旧石器時代の遺跡を確認した。最近、第 12 回『スヤンゲとその隣人達』国際学術大会で“Prehistory Migration in Eurasia and America”という主題でクルタク考古学地区 Kurtak archaeological area の最近旧石器研究の成果を発表した。1880 年代のサヴェンコフ I.T.Savenkov から始まったクラスノヤルスク地域旧石器研究はソスノプスキー G.P.Sosnovskiy、アウエルバハ N.K.Auerbakh、グロモフ (V.I.Gromov) などの著名な先学者達がアフォントヴァゴラ遺跡、ココレヴォ遺跡などエニセイ河を中心に 1900 年代前半期の研究を主導した。1950 年代後半、水力発電所を建設に際して、アブラーモヴァがこの貯水地域の調査を始めたことによりこの地域の旧石器研究が新しい幕明けとなった。1980 年代以降ドロズドフを調査責任者として、クルタク地区でベレゾコバ Bereshkova、ラズルログ Razlog、ラズリフ Razliv、カメンヌイログ Kamenniy Log、ベールイ・カーメン Verkhniy Kamen、ウスチ・イズル Ust-Izhul など 38 万年 - 10 万年前の遺跡が確認され、具体的な情報を得るための地質学研究を並行して行っている。さらに、それだけではなくカメンヌイログ遺跡からはムステリアン期の遺物を収集する成果が得られた。クルタク考古学地区 Kurtak archaeological area はダムが建設された貯水地域で、毎年多くの旧石器時代の遺跡が破壊されていて、至急に考古学研究を行わなければならない。先年、エニセイ河流域の代表的な遺跡であるアフォントヴァゴラ遺跡はアルテメフにより再調査が行われ、1990 年代のもう一つの重要な遺跡であるリストビエンカ (Listvenka) 重層遺跡の報告書が最近本になり

発行された。

イルクーツク大学にはメドヴェーデフ教授がいる。今日までの研究成果は多様で、特に最近石器を埋め込む技法に関する新しい理論的モデルを提示し、最近混乱している旧石器時代と第四紀地質学関連用語を整理する学問的基礎作業が行われた。旧石器研究者としてこのような作業は最近の東北アジア旧石器研究者達が使用する用語に関して辞典的な役割を果たす意味ある仕事になるだろう。特に、以前調査が行われたマルタ遺跡の再調査とアンガラ河とバイカル地域に関する地表調査を強化している。その過程でもっとも注目されている遺跡としてバイカル地域で発見したチェリヨムシュニク Cheremushnik 遺跡とイゲチェイスキログ Igeteiskii log 遺跡がある。前者は [Wurm1-2] で、 $> 40ka$ 以前と後者は Wurm 1 $> 60ka$ であると提案している。筆者達の見るところによればこの遺跡から発掘された複数の石核は原始的な形態とは関係なく典型的な細石核の形態を維持していることに注目されている。このような一連の新しい発見は人類の文化の展開過程が機械的な伝播論や文化的な発展段階が全地球的に行われていなかったことを示しているし、自由で活発な人類の性質をみせている。これからの細石器文化に関する起源論は新しい資料が十分に蓄積された後に議論の方がよいだろう。

最近シベリアの旧石器研究で注目されているのは過去の代表的な研究者を中心に引き上げ、研究史を懐古する研究書が継続的に刊行されている。たとえば、1998 年にはオクラドニコフ (A.P.Oklanikov) 誕生 90 周年を記念して、“Siberian Panorama through the Millenia” 主題の学術大会が開催された。1993 年には、オクラドニコフ誕生 95 周年記念国際学術大会が“Problem of Archaeology and Paleocology in North, East and central Asia” という主題で行われた。このような先学たちを記念する学術大会を通して過去の

代表的な遺跡に対する新しい評価と新しい遺跡の研究方向を確認している。特に 1993 年はロシア科学院極東考古学遠征調査 50 周年にあたる年でもあり、IA&E SBRAS と極東国立大学が共同で学術大会を盛大に開催した。2007 年にはイルクーツク国立大学でゲラシモフ M.M.Gerasimov 誕生 100 周年記念 “North Eurasia in Anthropogene: Peopole, Paleotechnology, Geoecology, Ethology and Anthropology” という主題で国際学術大会が開かれた。このような一連の作業は先学達の研究を尊重し、その研究成果を引き継ぐ良い伝統で、過去と現在の旧石器研究を系統的に継承するという学ぶところの多い作業であろう。このような作業過程を経ることによって過去に注目された代表的な遺跡を保存し、後学たちが改めてそれらの遺跡を再調査する際には、新しい調査技術に基づいて過去の歴史を考古学的に照らし合わせる立派な体系になると思うのである。

注

(1) この論文は 2007 にヨンガン財団の支援を受けて書かれた。

お知らせ

関連学会の開催

国際シンポジウム「アジア・西太平洋の第四紀—環境変化と人類—」

開催日 2007 年 11 月 19 日(月)～22 日(木)

会場 独立行政法人産業技術総合研究所共用講堂
(茨城県つくば市)

主催 日本第四紀学会、産業技術総合研究所

問合せ先 「アジア・西太平洋の第四紀」国際シン
ポジウム実行委員会事務局 (jaqua50org
@maist.go.jp)

公開国際セミナー「東アジアにおける古環境
変遷と旧石器編年」

開催日 2007 年 11 月 24 日(土)～25 日(日)

会場 同志社大学(京都市上京区今出川通烏丸上ル)

主催 同志社大学考古学研究室

問合せ先 同志社大学考古学研究室

(TEL 075-251-3437)

新入会員について

ニュースレター第 7 号発行後に以下の方々が本会に入会されました。

飯田茂雄、大場正善、笠井洋佑、佐藤雅一、
中野達也、中村雄紀、三木陽平、宮尾 亨、
山本 克、横山 真

会費納入のお願い

2007 年度会費の納入をお願い致します。
また、2006 年度以前の会費を納めていない
方は、速やかに納入して下さい。会費納入は
同封の郵便振替用紙にてお願い致します。年
会費 5,000 円で、振込先は、日本旧石器学会
郵便振替番号 00180 - 8 - 408055 です。

住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きを
お願い致します。事務局までメール等でご連
絡ください。

日本旧石器学会ニュースレター
第 8 号

2007 年 10 月 31 日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会
安蒜政雄・谷和隆・藤田尚・藤野次史

発行: 日本旧石器学会

事務局: 愛知学院大学文学部白石研究室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 05617-3-1111 ~ 8 (内線 3247)

E-mail hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp